

昨年春には集中豪雨があり一時間当たりの雨量としては過去最高を記録した。また、冬には二十四時間降雪量として過去最大を記録した。雪はその後も断続的に降り積もり今までにない積雪量になってしまった。これには樹木も悲鳴を上げ、多くの木の枝が折れてしまいヤナギの木などは幹自体が裂けてしまったものもあった。

私たちが竹山に暮らして五年であるが、その間に、大風、地震、豪雨、大雪といった攪乱を体験したことになる。過去もこんなに頻繁に攪乱があったのだろうか。攪乱は再生と多様性を保つための仕組みだとしても、頻度や規模が大きくなると、自然の再生力が追いつかない事態にならないか心配になる。

錯乱といえば、私たちが暮らすこの土地も人の手によって引きおこされた錯乱から始まっている。なだらかの丘陵を掘って埋めて平らな土地をつくるのに災害の威力とまでは言わないけれど、重機の力でさほど時間をかけずに済んでしまう。それも植物が再生するのに重要な表土をほとんど剥ぎ取って形を整えてしまう。幸いにして、この開発は規模も小さく、その後には続くことがなかったから、まわりの自然の力をいただいて半世紀かけて再生しつつあるが、もしこれが、規模も大きくなって続けに拡大する開発だったらこれもどうなっていたか。人が手に入れた重機という道具は、錯乱と同様の環境変化を頻繁に際限なく引き起こすことができるのだ。そして、その結果は再生と多様性とは異なり、不可逆的にして均質な場所になってしまう。

この土地を手に入れたときにいただいたアドバイスに中古のユンボを手に入れるべきとというのがあって、妻が苦い顔をしたのを思い出す。この程度の規模の土地であれば、小型のユンボさえあれば掘るのも運ぶのも積み上げるのも燃料さえあればなんでも簡単にできてしまうだろう。そして、やってしまった結果には長い時間付き合わなければならぬことになる。人の手が入るということは、大なり小なり攪乱的な行為であるが、その結果については再生と多様性を失うものであってはならない。この竹山で時間を過ごすうちにそういう気持ちになってきた。

人の手が入るといっても手作業であれば自然の再生力の方がはるかに勝る。草を刈ることひとつとっても、鎌で刈る程度であればちょっとぐらい妻が大切にしていた草花を切ってしまったも、いつの間にか知らん顔で戻ってしてくれる。さすがに太い丸太の玉切りはチェーンソーがなければ苦しいが、ここでの作業はできる限り手作業にこだわることにした。そうすることが自分自身にも良いことがある。おかげで食事制限などせずに自然にダイエットできるし、年をとっても筋肉を維持できる。S市のまちなかにいたときは近くのホテルのジムに通っていたこともあるが、それに比べてお金もかからないし、筋肉自慢のおじさんたちの圧に耐えることもなくて済む。なにしろ気持ちが良いのだ。清々しい空気をいっぱい吸って、穏やかな風景に囲まれ、汗を流す。こんな贅沢を味わわない手はない。

